



Salamander
in
the circle

第四章

レムリアン・ラブソディ

峯村 明

Salamander in the circle

登場人物

ダーヴェ・・・・・・・・ネウトラ評議会・学術調査団の団長
ヒューダー・・・・・・・・〃 団員
ヤスウ・・・・・・・・〃 団員
イリチヤ・・・・・・・・ヒューダーが名付けた少年
レル・・・・・・・・エウメロス王国・王室付き近衛隊長
ヘルガ・・・・・・・・〃 王女
ホシナ・・・・・・・・世界の果ての島に住むホシナ族の族長。マミヤの父
マミヤ・・・・・・・・ホシナの娘
サノヒコ・・・・・・・・島の王に仕える役人
コタエ・・・・・・・・島の王に仕える女官

目次

レムリアン・ラブソディ

58.

59.

60.

61.

62.

63.

64.

65.

66.

67.

68.

69.

70.

71.

72.

73.

74.

第四章のあとがき

参考サイト

レムリアン・ラプソディ

58.

地球はかつて巨大な動物だった。その大きさに相応しく、かなり怠け者で、ゆっくりと地軸が回転していた。地球は翼竜を通して宇宙空間を眺めていた。翼竜は地球の目であり、すべてを眺めていた。

『地球年代記より-レムリア時代』

59.

「い、いやだ、いやだあー！！」ヤスウは絶叫し、泣き叫んだ。「ぜったいいやだ！やめてくれー！ 返してくれー！！」

「お、お放してくださいませ」

「コタエどのが困っておられる。ヤスウ、手を放せ。諦めろ」

「いやだいやだいやだ！ それは先生のなんだ、先生の形見なんだぜ〜！！」

形見と決まったわけじゃないのに。レルはそう口をはさもうとしたが、ぐっと思いとどまった。形見ではないと決まったわけでもないのだ。

「ヤスウ、コタエどのはその眼鏡を解析してみようと言っておられる。だからいつか預けるだけだ」

「か、解析ってったら、粉々に砕いて、すりつぶして、水に溶かして、リトマス試験紙

をつっこむんだろ！」

「そんなことは、いたしません！！」

コタエはさすがに怒って、衣をつかんでいるヤスウの手を振り払って襟元をかき合わせた。男たちは見ないように目をそらしていたが、白い平織りのすべらかな衣の胸元を結ぶ若草色の紐はほどけ、半分脱げかかっていたのだ。

ダーヴェの水晶製の眼鏡を見て、「ひょっとしたら、それは視力を調整するだけのものではないかもしれない」言い出したのはコタエだった。「ダーヴェさまは上級賢者、希少な水晶を眼鏡にするほかに、別の使い方をご存じだったかもしれませんよ」

「別の使い方、とは？」と、ヒューダー。

ええ、とコタエはあいまいな返事をした。『かもしれない』ことで、余計な期待をさせたくないと考えたのである。それで、「とにかく、解析してみましょう」と提案したのであった。

振り払われたヤスウは、なおも半泣きでコタエにすがりつく。「待って！ 待ってくれって言ってんだよお！」

「しばらくお借りするだけですってば！ あとでお返ししますから！」目をつり上げていたコタエは、ふと表情を変えた。「そうだわ、そなたも一緒にきなさい」

「へ？」

「その聞き苦しい言葉使いを正してあげましょう」

「え”」

60.

王の宮殿の敷地内には山があり谷があり、湖がある。水は地下水、試しに手を入れてみたレルはあまりの冷たさに飛び上がった。その水の中でイリチャは日がな一日、泳いでいる。水は透明で深い底までよく見える。

(よく見えても見えなくても、ぞっとしないな) とレルは思う。(あんな深いところまで潜って、途中で息が続かなくなったら、足がつったら、そういうことを考えないものなんだろうか)

そんな心配は無用だから平気で潜水してられるイリチャである。二日前までケガをした左肩が動かせなかったのがウソのような回復ぶり。まあ、回復直後の開口一番が、「泳ぎたい」だった。ヒューダーは呆れて言った。「さもありません、だな」、「レル、おまえ、見張ってくれないか」「ボク？ いいけどね」「イリチャにはおまえのような‘かたい’人間が必要だから」「……？」

どういう意味なんだ、と思いつつ、腰掛に座って律儀に膝に手をおき、額に汗して見張り役をつとめるレルである。

ヒューダーは湖のほとりのあずまやで、さっきまで書物を繰っていた。レルはそれを見て、剣の稽古でもしていた方がよほどサマになるのに、と思ったものだ。本人はどこへ行ったのか、繰っていた書物は腰掛に置いたままになっている。

ヤスウは……コタエに連れ去られたきり、戻って来ない。

湖面は空の青さと周囲の樹木の緑を映し、時おり光が跳ね、静まり返っている。どこかで弦楽器が鳴っている。ふっとレルは息をつく。気が遠くなりそうなほど静かでのどかな湖水のほとりで、彼はひたすら王女を奪還する道を探していた。

61.

「水晶という鉱物は、その内部に情報を納めることができます」

コタエはいつも白い色の衣装を着ているが、今は少々、様子がちがう。素材は鶴の羽、呪法を用いて織り上げる、ひじょうに特殊な織物で作られた装束で、神々の加護のもとに邪を退けるのだという。飾り紐は若草色、サッシュベルトは緋色。白、若草色、緋色の取り合わせを着用している女官をほかに見かけないから、コタエだけのものらしい。彼女は机を前にしており、机の上には紫色の絹布。ダーヴェの眼鏡が載っている。

「眼鏡以外の使い方とは、そういうことか！」

はい、とコタエはうなづく。「けれども、情報を納める、取り出すには、特別な力が必要なのです。たとえば……」

「上級賢者、また、コタエどののような？」

コタエはぱっと目を見開いてヒューダーを見た。

「ああ失礼。つい、気が急いてしまって」

「無理ありません。大事なお仲間の持ち物だったのですから。では単刀直入に。解析してみたところ、この水晶製眼鏡には膨大な量の情報が蓄えられているとわかりました。その一部を取り出してみましよう」

コタエの手のひらがヒューダーの右手側の壁を指す。そこには金属の円盤、かがみが据え付けられていた。その鏡面にわずかにさざ波がたつ。ヒューダーは息をのむ。かがみは媒体だった。眼鏡に蓄えられた情報はいまや、かがみからあふれ壁一面に展開されていた。

62.

整列した巨人族。その数は数千。手に手に得物を持っている。場所は見覚えがある。ケストルの闘技場。ヒューダーの嗅覚が捉えたように、やはりあの闘技場は巨人族のホームグラウンドだったのだ。それにしてもおかしい、とヒューダーは思う。この膨大な頭数。評議会では生存する巨人族の数をだいたい把握していた。せいぜい数十体だ、と。それも全世界で。こんなにいるわけがないのだ。それとも、評議会の知らない所で生きながらえてきたのか——？

画像が揺らぎ、別の画像が重なってくる。触れれば押し返してきそうな存在感を空気を感じる。単に画像に立ち会っているだけなのに、息が詰まりそうだ、とヒューダーは感じている。

分厚い、水の壁を通してのような、濃密な空気の向こうに影がゆっくりと動いている。あれはなんだ——目を凝らせば——猿とも——人とも——つかないその者の身の丈はいったいどれくらいか？ 周囲にシダが葉を広げているが、その高さが『彼』と同じくらいある。ヒューダーはひざ丈くらいのシダなら知っているが、『彼』と並んだシダが高いのか、それとも『彼』が小さいのか？ 広い肩幅を持つ胴体に、手も足も異様に長い。そして胴体に乗った頭部は、異様に小さい。そのバランスのおかしさは滑稽なほどで、ヒューダーはショックのあまり、ごくりと喉をならす。まさかあれは巨人族の祖先ではないか？

後姿を見せていた『彼』は立ち止まり、あたりをうかがっているようだ。小さな頭に髪の毛はなく、目は側面についている。ということは、己の背後まで視野に入っているのではないか？ ヒューダーは思わず地面に伏せた。向こうを向いている『彼』と目が合ったような気がしたのだ。

(大丈夫) とコタエがささやく。(『彼』に私たちは見えていません)

そうはいつでも、とヒューダーは思う。自分の手がぬかるんだ地面をさわっているとわかるからだ。空気の厚い感触、地面の柔らかい質感。『彼』と同じ空間にいるのと、か

わらないではないか。

『彼』は両方の手に何か握っている。片手に棒の様な物、片手につる性の植物を幾本もねじり合わせた、ロープのような物。ロープをたどって視線を動かしたヒューダーはまたもやショックを受ける。トカゲのような頭部をつけた長い首が不格好な胴体につながり——ぬかるんだ地面の上でその胴体を支えているのは、ヒレだ。体だけで『彼』と同じくらいはある。首はその倍の長さ。首長竜！

イリチャを襲ったのに比べればかなり小さく見えるが、首長竜に間違いない。その首長竜が、長い首をヘビのような動きで地面に沿わせる。何かに狙いを定めるように。同時に『彼』は手近のシダに身を寄せ、そろそろとしゃがみ込む。両者の視線は同じ方向を向いている。その先に何があるのかヒューダーの位置からは見えない。たぶん、獲物だ。『彼』は首長竜を使って狩りをしていたのだ。

ヒューダーがそう悟った瞬間、首長竜の首の先でシダの葉がはげしく揺れ、『彼』はすっと立ちあがった。噛みつかれた獲物が抵抗して暴れているのだろう。『彼』は握った長い棒を振りかざし——コタエは悲鳴をあげて顔をそむけた。

悲鳴を聞きつけた老警護官がすかさず、「失礼つかまつる！」と声をかけ、部屋の外から戸をあけ放つ。壁では惨劇の真っ最中が映し出されていて、警護官は腰をぬかした。

「コタエどの……！」ヒューダーは身を震わせるコタエに手を貸そうとして、自分の手をみた。ぬかるみについた手だ、汚れているはず……しかし、手は濡れてもいず、泥がついてもいない。怪訝に思いながら、彼はコタエに手を差し出した。

「……大事ありません……」その手につかまりながらコタエはつぶやく。「おはずかしい。ただの絵（映像）ですのに」

「いや」ヒューダーは言い、さりげなくコタエから手を放す。「なんという臨場感だ。ただの絵とは思われん」たった今まで、獲物の断末魔の絶叫が空気をびりびりと震わせ

ていたのだ。

「この水晶に情報を納めた方が、それだけ高い技術をお持ちだったのです」

ヒューダーは頷きながら言った。「情報を取り出すのに相当、体力、気力を使われるとお見受けした。このくらいにしておきましょう」

しかしコタエはきっぱりと首を横に振る。「そうはまいりません。わたくしのことはお気になさらず。それより、先に進みましょう」

警護官が這うようにして退散し、ヒューダーとコタエが気を落ち着けている間にも絵は進んでいく。

首長竜が捕まえた獲物を『彼』は素手で引き裂く。コタエでなくても目をそらしたくなるグロテスクな場面だが、ヒューダーは目を疑う。『彼』は獲物の半分を首長竜に分けてやっている。首長竜は当たり前のように……むしろ、嬉しそうに……受け取る。

『彼』と首長竜はロープでつながっているものの、使う者と使われる者、支配する者とされる者、といった関係ではないらしい。長い時を経て、この島国の近海を首長竜が警戒して回るといふ重要な役割を任されていることからしても、両者の間には太古の時代から信頼関係のごときものが築かれてきたのかもしれない。

そしてヒューダーは『彼』に注目する。凶悪かつ醜怪な巨人族の祖先たる『彼』が、同族ではない首長竜に注ぐ眼差しに滲む感情。それは慈しみ、と呼んでいいかもしれない。もっとも、『彼』の個性なのかもしれない。

絵を映す視点がぐっと手前に下がり、次いでぐっと上に移動すると、視界は大きく開ける。見渡す限り、一面、褐色の泥沼とシダの森。いたるところで水たまりが厚い雲間から射し込む日光に鈍く輝いている。そこは『彼』らが生命を謳歌する天地だった。

63.

『彼』らの子孫は驚くほど多様に混血した。同じ人類の他の種族はもとより——。あまりの多様さと、また、猥雑さとは、ヒューダーの想像を絶していた。ダーヴェが納めた情報なら伊達や酔狂のたぐいではない、精度は高いのだと、そうとわかっている、学者としても、一個人としても、あまりに受け入れがたかった。受け入れられずにきつく目を閉じて頭を振った。

己がこんな状態なら女性のコタエは大丈夫だろうか。彼は案じ、それとなく様子を見かけた。彼女は気づいてちらりとヒューダーを見、そっとうなずいた。心配は無用、ということらしかった。

そして問題は、ケストルはどうやってあの大勢の巨人族を集結させたのかということだ。それがわからない。ダーヴェの水晶眼鏡はそう言い、はるか南の方角を示していた。

ケストルの南——ヒューダーは独り言ちる。

「南に、なにがあるのでしょうか？」

「都が。とても古く、とても大きな都です。メッサナという。昔はアンベレオという国の地方都市だった。ある時、災害が起こって国土の一部が水没、メッサナは本土から切り離されてしまった。かつてメッサナの市長だった人は学問と芸術の探求に熱心で、メッサナ市はもともとそのために造られ、栄えた。今は本土の王家の人間が総督となっ

ているが、学問と芸術の都であることには変わりはない」

「学問と、芸術……」

「ゆえに、なんびとも、拒まず。メッサナには城壁も砦もない。石造りの、堅牢で、美しい都です。たとえ——巨人族であっても壊すことはできないでしょう」

コタエは眼差しを宙に据え、なにか思うようだ。

「ダーヴェはおそらく、メッサナへ……いや……まさか……」

「……？」

「南には——」つ、と、ヒューダーは立ち上がった。「少々、考え事をしたく。コタエどの、ご尽力に感謝を申し上げる」短くそう言って、部屋を出て行ってしまった。

64.

すべての王国の根幹、という語が枕詞のようにくっつくネウトラ評議会だが、世界中のあらゆる事物を網羅しているわけではない。中立であるはずの評議会と一加盟国の構成員同士がなかよく手を繋いでいたという事例もあり——そういった場合の評議会員には問答無用の厳罰が用意されているにもかかわらず——ほんとうに危険な兆候はつかみづらいものなのだ。

ケストルのウルリク王子によると、肝心の評議会本部を巨人族が襲ったという。ケストルは確かに戦争をなんとも思わない、好戦的な国ではある。百歩譲って、隣国エウメロスに襲ったのはわからなくもない。しかし評議会本部を襲ってなんとするつもりか。それもエウメロスのように地続きではない。はるかに海を隔てたところにある評議会本部を、である。

古代の優れた技術で造られたメッサナの堅牢さを表現するのに、コタエにはあんなことを言ったが、巨人族の侵攻におそらく、耐えることはできるだろう。しかし——

メッサナが防御のための施設を持たないのは、学問と芸術を探求する者を拒まない、

それだけではない。

『知は太陽なり』

この時代、人々の崇拝の対象は太陽だった。『知』は『太陽』に等しい。

多くの未開の人々を導くには、仰ぎ見る光と体感できる温かさが要る。ならば、『知』は『太陽』と同じ性質を持つべきである。驕慢からではなく、メッサナ創設者の自負心だった。強烈な自負心は目に見えない砦と化した。心理的な砦。

しかし、反発する者は必ずいる。メッサナに対する反発者の代表は、ケストルだった。ケストル人の『知』へのコンプレックスが反発させたのである。

そこまで考えてヒューダーはぞくりとした。力で叩き潰せないなら、違う方法を探すかもしれないではないか。例えば——相手が二度と立ち上がれないほどの強烈な、ダメージを与える、何かだ。

(そうだ……ケストルは昔から悪評が高いが……今回は何か違う。黒幕……?)

考えに沈んで当てもなく足を運ぶうち、いつしか建物を出、水辺に出ていた。レルがイリチヤの泳ぎを見張っていたあずまやがすぐ近くに——

「——レル！？　どうかしたのか!？」

65.

「ああ——ヒューダー？」

びしょ濡れのイリチャがレルの足元で突っ伏している。ぴくりとも動かない。

「ようよう水から上がってきたと思ったら、倒れてしまって。どうしよう、どうしたらいい？」レルはおろおろと手をこまねくばかりだ。

「ずっと泳いでいたのか？」

「ああ、ずっと」

「体が冷たい。温めてやればいいんじゃないか？」

そろそろとイリチャを抱き上げたヒューダーは日当たりのいい場所を探し、ヤハズエンドウの柔らかい茂みにそろそろと横たえてやる。

「食用だそうだが。勘弁してもらおう」

うると菜の畑に踏み込んでゴンに叱責されたのを思い出して、ヒューダーはふっと笑った。それから、いまだおろおろしているレルを安心させてやる。「なにしろ、長いことイモリだったからな。その感覚で冷水に浸かってたんだろう。温まれば元気になるさ」

「ほんとに？」

「たぶん」

「そうだ、なにか温かい飲み物を貰ってくるよ。内側から温めてやろう」

「それはいい考えだ」

レルが行ってしばらくすると、イリチャはうっすらと目を開けた。

「……気分はどうだ？」

「悪くない。死ぬかと思った。なんだか……」

「……ん？」

「ふんだりけったりだ」

「生きていけばいろいろ起こる。そういうものだ」

「そういう、もの？」

「ああ」

「……これは、なに？」

「ヤハズエンドウという植物だ。花はそのうち実を結ぶ。若い芽も若い実も食べられる。よく熟した実も」

「ふうん……食べたこと、ある？」

「いや。話に聞くと、なかなか美味だそうだ。この国では植物が主食だから……どうした、具合がわるいのか!？」

イリチャは向こうを向いて脚をひきつけ、体を丸めてしまった。

「そうじゃない」と彼はうめく。「ぼくはただ……こんなふうに話をしたかった。それだけだったんだ。……けがは？ まだ痛い？」

「いや、まったく」ヒューダーははたと気が付く。イリチャは闘技場での決闘のことを言っているのだと。

「イリチャ」

「……」

「イリチャ。聞いていいか。おまえはどこで槍を習ったのだ？」

「え……」丸めていたからだを伸ばし、仰向けになり、ゆっくりと起き上がる。「どこ、で……？」思い出そうとしているイリチャを、ヒューダーは辛抱強く待つ。可憐な赤紫の豆の花が風に吹かれている野。

レルがコタエとともに戻ってくる。コタエは茶碗を載せたお盆を持っていた。「薬湯をお持ちしました。さ、皆さんもどうぞ」

美しい女官から飲み物を手渡されたイリチャは、はにかんで、ありがとう、と小さな声で礼を言い、茶碗を両手の平でつつみこんで、あったかい、とつぶやいた。

「そう……どこで……ってことはないよ。ぼくはただ言われたまま動いただけ……」

「言われたままとは？ 誰かが？ 何か言ったのか？」

「うん」

「それは誰だ？ おまえはそいつの名を知っているのか？」

「ああ、知ってる。べ」

「待て！！」ヒューダーはいきなり鋭く言った。イリチャはびくっとし、手にしていた茶碗を落っこしそうになった。コタエが反射的に手を出して支えてやる。

「な、なに？」

「おまえ、そいつの名を知っているんだな！？」

「知ってる。むこうが自分で名乗ったんだ」

「……………」

「それが……どうかしたの？」

「いいか、イリチャ、心して聞け。そいつの名を、決して、口に出してはならん！ 考えるのもだめだ！！」

「ど、どうして？」

「その名を口にしたとたん、その名の持ち主は、おまえの居場所を知ることになる。あるいは次の瞬間にもこの場に現れる。そういう呪法があるのだ。召喚というやつだ」

イリチャのなめらかな頬がそそけだった。

「まあ、おまえがもう一度会いたいなら、呼べばいい」

イリチャはふるふると首を振った。

なおもイリチャからそいつの人相風体を聞き出すうち、ヒューダーは確信した。死神だ。

そいつは当初、イリチャの名に関心を示さなかったらしい。（関心を示されても名乗る名はなかったのだが）しかし自分から名乗った。その名を呼ばれれば、そいつはすぐさま馳せ参じるだろう。破滅の鎌を携えて。しかし逆はあり得ない。死神こそが人を破滅に『導く者』だからだ。

66.

「やあ。みんな。おそろいで、お茶の時間だね。私も同席させてもらえるかな？」

とつぜん現れたその男は、うやうやしい仕草とともにそう言った。

「——なんのマネだ——」

「なんのマネとは！ ひどいなあ、ヒューダーくん。君の友達顔を忘れたのかい？ レルくん、君は私のこと忘れるなんてひどいこと、しないでらうね？ おお、イリチャくん！ 元気そうじゃあないか。お茶はおいしい？ そう？ いや、よかったよかったです！ コタエさま、私の分もありますか？」

レルとイリチャはそろってあつけにとられ、ぽかんと口を開けた、同じ表情。

ヒューダーは気を取り直すように頭を振り、コタエに向き直った。「コタエどの！！
どういうことですかこれは！！」

「はあ、言葉使いを直してさしあげただけですわ。あんまり聞くに堪えなかったものですから」

「そ、そうですか。しかしですね、直ったのは言葉使いだけじゃなさそうですよ！ 顔つきも、性格も！ これは以前とは別人のヤスウですよ！」

「あら、言葉が直れば顔つきも性格も変わるものです。ごらんない、言葉が直っただけで、物腰がすっかり落ち着き、性格も穏やかに。ヤスウさまはもともと、この国の血

筋。この姿がヤスウさまの本当のお姿なのです」

「そ、えー、おいヤスウ！ おまえはそれでいいのか！？」

「以前の私はほんとうに、聞くに堪えず、見るに堪えない、しょうもない人間だった。これがいいよ、ああ、生まれ変わったようにすがすがしい！」

「おまえ——空を飛びたいと、思わんか？」

「空？」ヤスウは両手を腰に当て、優雅な物腰で顔を斜め上に向け、空を仰いだ。「そうだねえ、あんまり。人間とは、地に足をつけて生きていくものさ」

レルが えっ、とヤスウを見上げ、それからヒューダーに目を移した。当惑の目。

「そうか」ヒューダーの口調は重い。「ならば仕方あるまい。ヤスウ、この地で別れよう」

「は？ それはどういう意味——」

「おまえの力の源泉は『跳躍』への渴望にあった。その渴望がなくなればおまえは魔法使いではなくなる」

「あ——」

「ダーヴェ調査団におまえは必要だった。だが——あとは言わなくてもわかるだろう」

「そ——」

「評議会本部の様子がわからないからにはおいそれと本部には戻れまい。魔法使いでなくなるなら足が必要だろうが、航空機はオレがつかわせてもらう。おまえはこの地でおだやかに、地に足をつけて生きていけばいい」

ヒューダーはヤスウとにらみ合っていたが、やがて、ふいっと歩き去った。

67.

窓にもたれてヒューダーは風に吹かれている。空は橙色に染まり、どこかでカエルがケロケロと鳴いている。夕餉の支度に立ち働く人たちの気配。おだやかな夕暮れ。

遠くへきてしまった。そんな感慨を覚えている。

シダと泥沼、重く立ち込める雲、水中を歩くような感触の空気。異形の人、異形の生き物たち。なかよく獲物を分け合っていた『彼』らは、幸せな夕餉のひとつきだったのだろうか。

いったい、いかなる力が働いたものか。『彼』らの子孫の一部は巨大化し、同族といわず、他族といわず、手当たり次第に動く物を食するようになった。時に獲物を奪い合い、その相手を攻撃した。間近にその有様を見、犠牲になった者たちの恐怖は計り知れない。初期の評議会の行いがなければ人という種族は絶えていたかもしれない。一方で、その折に様々な武器や動力、爆薬、薬品が発明され、今に伝わるものも数多い。

決死の必要に迫られると人は思いがけない力を表すものだ、ヒューダーは苦笑とともに

にそう思う。

「力の表出の仕方は人によって異なりますけど、ヤスウの場合はまさに断崖絶壁に立った時に魔法使いとして現れたのですよ」ダーヴェからそう聞いている。

*

「ヒューダーさま……」

「コタエどの？」

「ヤスウさまに、泣いて頼まれました。元に戻してほしいと」

「ヤスウが……？」

「あんなに泣かれるとは……わたくし、良かれと思い、余計なことをしてしまったようです。どうか……お許しを……」

「いや、オレは彼の同僚としてここに残れと言ったまで。これからの旅は力のない者には難しいものになるでしょうから」

「……………」

「それにしても、言葉使いひとつで人格まで変わってしまうとは。正直、驚きました」

「ここは、言霊が生きる国、ですから」コタエは微笑んでそう応えた。「夕餉を、こちらのお部屋に運ばせていただいてよろしいでしょうか。皆さん、ヒューダーさまと一緒にとおっしゃってられます」

68.

ひと泣きした後のヤスウはよく食べた。ダーヴェの眼鏡が遺品ではない可能性があるとなれば、なおさら食欲は増した。

「いやあ、うめえうめえ！ 生き返るぜ！ このヤハズエンドウの若芽の天ぷらがかかりっとさくっと、ひとくちかめば口の中に広がるほのかな甘み！ 初夏の野が目に浮かぶじゃあねえか！ うめえ！！」

「ヤスウはやっぱりこうでなくちゃね。一時はどうなるかと本気で心配しちゃったよ」レルはヤスウの豪快な食べっぷりに感心し、イリチャはぼそつと言う。「ぼくはやつが来たのかと思った」

給仕の女官は「ご用があればお呼びください」と、退出。いつの間にか男ばかり四人の食卓。

ヒューダーはなかば呆れていた。「簡単に元に戻せるものだったのか」

「いやいや、コタエさまだから簡単に元に戻せたんだ。彼女、すごく位の高い人で、力も強いんだよ」もぐもぐと口を動かし、カラの箸をヒューダーに向けてヤスウは言う。

「りせつと、とか言ってた」

「どういう意味？」とイリチャ。「元に戻すということだ。しかし、あれだな」とヒューダー。

「なんでい」

「言葉というものは人格そのものだな」

「また飯どきにめんどくさいこといいやがって」

「おまえ、自分で気づかなかったのか？ あの時、おまえのキャラが崩壊していたぞ」

「え——」

「なんだ、気づいていなかったか。ではアイデンティティまで立ち位置がかわっていたというわけだ」

イリチャがきょとんとしているのでレルが説明する。「ヒューダーはね、言語学者なんだ。だからこの時代のじゃない言葉まで知っているんだ」

やがて、食後のお茶を運んできたコタエがヒューダーに耳打ちした。「面会の方が見えているのですが」

「面会？ オレに？」

「はい。別室にお通ししてございます」

69.

「おお！ これは！」

ホシナだった。ホシナはヒューダーに駆け寄って日焼けした顔をほころばせた。

「外国から幾人かお客が見えているというのでな、特別に肉の注文がありましたのだ。なんとヒューダーどのがの一行であったとは！」

「そういえば主菜は肉料理だった！ なんの気なしに食べていたが、そうか、ホシナどのが調達してくださったのか！」

「はは、うると菜もたっぷりつけさせてもらいましたぞ！」

ふたりは手を取り合って再会を喜び合ったが、問題……マミヤ救出……になんの進展もない。それでもホシナは娘が遠い異国の地で無事であると知って、深く安堵した表情を浮かべた。ヒューダーは、彼女を連れて帰れなかった不手際と己の力不足を詫びた。

「ヒューダーどの、わしの娘じゃ、ほんとうなら父のわしが探しに行かねばならんところ。なのに、文官のおぬしが命がけの探索をしてくれておる。それだけでも、どう礼をいってよいかわからん。どうか自分を責めんでください。それは、わしひとりではない、ホシナ族全員の思いと思っただきたい！」

両手を握って逆に力づけられながら、ホシナはすでに何かしらの覚悟を決めているのではないかとヒューダーには感じられた。彼は、自分の腕をつかんだ大の男を思いきり蹴りつけて会心の笑顔を見せたマミヤを思い起こす。そして訳もなく、彼女は大丈夫だ、と思う。マミヤには、不遇の環境にあっても傍らの人間を安心させるものがあった。大洋をはるか越えた海の向こうの大陸に捕らえられているマミヤ本人は大丈夫かもしれない。だがオレには——ヒューダーは苦く考えずにいられない。少女ひとり、彼女の帰りを待ちわびる人々のもとへ返す術を、オレは持っていない——

「なあ、ヒューダーどの、ここで会えるとは思わなんだ。今後もいつ会えるともしれぬ。それで……話しておきたいことが……」

ヒューダーが何事かとまなざしを向けると、ホシナは口ごもりながら話し始めた。

70.

「ホシナの祖先はずっと昔、ずっと北からやって来たという話をしましたな。長い旅の中で、ある時、ひとりの幼子に神託がくれた。曰く、『ホシナ族は南の地にて黒い高貴の石を養う役割を担う。心せよ。其はかの地にとどまらず』。」

「……………」

「この国の王から賜った黒曜石の鉱山は、祖先らにとってまさに南の地、神託の通りのことが起こったのだ。我々は見守られている、一族の者が畏敬の念に打たれたのは言うまでもない。しかし神託には続きがある。心せよと。其はかの地にとどまらん、と。わしは、さらに南へと送られたゴンのことを言っているのではなかろうかと思った。だが——違うかもしれん。ゴンをさすのではないかもしれん。長い歴史の中、ホシナ族から離れた者は、そう多くない。わしの知る限り、ゴンのほかにもうひとりいる——」

「ホシナ……………」

「そうだ」

「ホシナ……………」

ホシナは強い思いをこめた目をヒューダーの背後へと向けた。「ことによっては、我らはマミヤの後を追うことになるやもしれん」

71.

エウメロス王国の国土は世界でもっとも古い場所のひとつだ。悠久の昔から人が集ま

り、去っていった。国が興り、滅びた。数えきれない記念碑があり、墓地がある。古びて塵と化したもの、戦場だった場所もある。

古いだけに、その広大な土地そのものが聖地だった。そこへやってきて太古の遺物を目にした人は、畏敬の念を示し、破壊を避けた。遺物の上に自分らの都を築くことを避けた。自他の文化を融合する道もできた。長い歴史の中、国々が栄え、滅び、エウメロス王国が興った。

巨人族は、エウメロス王国だけでなくエウメロスに連なる歴史をも踏みにじった。

このようなことが許されようか。

「許されぬ」

「黄金門の主（あるじ）よ——」

「決して、許されぬ。エウメロスの王よ。そのほうの無念、余がしかと受け止めた」

「ありがたき——幸せ——」

病床のエウメロス王を見舞い、ついに看取ることになったのは、時の皇帝。壮麗な黄金の門をもつ都に住まっていたので黄金門の主（あるじ）と呼ばれている。そのやんごとなき皇帝が御自ら、なぜ、城を失くした病王を見舞うことになったのか。

皇帝の御座所、黄金門市が攻撃されたからである。ほかでもない、巨人族によって。皇帝は抵抗は無駄と悟って早々に安全圏に避難した。避難先はエウメロス王国の地下だった。エウメロス王国の国土は地殻変動の影響を受けない、地質として世界でもっとも古い場所であり、かつ、もっとも安全な場所。それは、ごく限られた者しか知らない事実である。エウメロスの一般市民は国土の沖に無数にある島々へ逃れたが、王家の者、避難に耐えられない病人などは地下のシェルターへ入った。そこには有事の際の皇帝専用のスペースが古来、確保されていた。

巨人族の出どころに頭を悩ませていたのはヒューダーたちばかりではない。生き残った人々共通の疑問だった。世界各地でほぼ時を同じくして巨人族が現れていた。よって、被災地は孤立し、情報は分断され、手掛かりはあまりに乏しかった。それでも、徐々に情勢が明らかになると、非常に顕著な様相が見て取れた。広範囲に無傷の場所がある。エウメロス王国の西の地すなわちケストル王国。そして、黄金門の都の南方にあるアンベレオ王国。

皇帝付きのスタッフとエウメロスの国防軍との間で再編成された巨人族対策部隊の面々は思わず互いの目を見かわした。

72.

「おいーそりゃあほんとうなんか！？　なんで今まで黙ってた！？」

「べつに黙ってたわけじゃあない。だいたい、軍の関係者に遠感能力は必要ないし、むしろ邪魔になる。命令は口頭で確認するからね。それがどういうわけか、急にはっきりわかるようになったんだ。他人からのメッセージが」

レルは遠感を働かせようとしたわけではなかった。ただ故国を案じ、避難した人々を案じているうちに、暗闇でいきなり顔を突き合せたように、彼の名を呼ぶ声に出くわしたのだった。彼を呼んでいたのは、本国のカール王子だった。

カールは憔悴していた。病王は避難先でついに身罷り、姉王女はケストルへ行ったまま、摂政の叔父は右往左往するばかり。崖っぷちに立った十三歳の少年は助けを求めて、彼のもっとも信頼できる存在、近衛隊長の名を虚空に向けて叫んだのである。

もともと、「お困りの時は、私をお呼びください。いつ何時でも駆けつけてまいります」、常々そう言い、少年がなんでもかんでも自分で抱え込んでしまわないように仕向けていたのは、レルだった。この度ばかりは呼ばれたところで直ちに駆けつけるには距離がありすぎるが、ヘルガ王女を救出するにせよ、本国に戻るにせよ、いつまでもこの世界の果ての島で待機を続けるわけにはいかなかった。

皇帝は、異民族が形成する王国を包括する首長である。ネウトラ評議会は皇帝の在り方とは異なるが、双璧を成す立場ではあった。

ヒューダーは黙々と考え込んでいる。その皇帝が黄金門市を焼け出されてエウメロスの地下シェルターに避難していたのは驚きだった。黄金門市は失われたかもしれないが、エウメロスが皇帝の権力と手を結ぶ道が開けたのだ。

「レル」

呼ばれてレルはヒューダーを見た。

「あくまで、オレの考えだが……おまえは本国に戻ってはどうか」

「……なぜそう考える？」

「あくまで、あくまでオレの感じていることで、オレの考えだ。ケストル王国はお宅の王女殿下を保護していると言ってきたのだろう？ ならば外交ルートで、返してくれ、そう要求するのだ。考えてもみろ、殿下はおそらく魔法によって鳥にされ、鳥かごに閉じこめられている。どういう魔法か、何者の魔法か、わからなければ、鳥かごと奪還したところで鳥のまま、人間に戻せない恐れがある。だから元の、本来の姿に戻して返還させるのだ」

「……………」

「それでも返せないというなら、国際法に則ってネウトラ評議会上に訴えると言ってやれ。たとえ評議会本部が破壊されても、法は存在する。法を承認した皇帝は生存しているのだから」

「うむ……」

「おまえは殿下奪還のためにケストルに乗り込みたいかもしれないが、それは逆効果だ、親切に保護しているものを強引に引き上げようとするとしてケストルにどんな口実を与えるかわからん。レル、今のケストルは狡猾で、危険だ」

得体が知れなさすぎる。得体の知れないものを取り憑いている。それはおそらく……

「エウメロスの次の王にとっておまえはかけがえのない存在なのだ。そうだろう？」

レルはしかし、逡巡する。「そうはいつでもヒューダー。マミヤが。マミヤがヘルガ様と一緒にいるじゃないか——」

73.

「レルさま」部屋の隅で黙って控えていたコタエだ。「お願いがございます。わたくしをエウメロス王国へお連れください」

「え」

レルでなくても、意外な申し出だった。

「あなたを、ですか？ そんな、なぜ、いや、だいたい、どうやって？」

「最初のご質問。今レルさまがおっしゃられたでしょう？ ケストルにはエウメロス王国の王女様と一緒にわたくしどもの民が捕らえられている。この者マミヤは、本人の意思でかの国へ渡ったのでも、王女様のように保護されているのでもありません。この国の居住地から拉致されたのです。国として取り返さねばなりません。二番目のご質問。わたくしが。わたくしにはヤスウさまのように空間を飛翔する力がございます」

「失礼ながら。本気ですか!？」

「本気です。これは王の命でもございます」コタエはそう言って頭を下げた。

74.

かくして――

レルはコタエと共にエウメロスへ向けて旅立つ。漆黒の髪を惜しげもなくぱっさりと切り落とし、瀟洒な宮廷の衣装から簡素な旅装へと着替えた、少年のようなコタエを見てレルは絶句した。王の命なのか彼女自身の意向なのか。

上級賢者レベルの能力を持っているらしいことは彼女の言動の端々から気づいていたが、その能力も思いきりのいい決断力も、なよやかな外見にどこかそぐわなかった。サノヒコがこっそり教えてくれたところによると、マミヤ探索に関する諸々はコタエの発案だというのだ。人材の選考に頭を悩ます王を彼女が説得し、ついに王は同意したのだと。

レルは言わずにいられなかった。「きっと、無事にお帰りいただきます……」

サノヒコは黙って幾度もうなずいていた。

ヤスウは単身、評議会本部へ向かう。巨人族に襲われたというネウトラ評議会を実際に見ないことには話しにならない。ヤスウ自身の身内の安否もある。

そしてヒューダーはイリチャを伴ってメッサナへ。そこに……あるいはその近辺に……ダーヴェがいるかもしれないからだ。

「みんな。無事で。また会おう」

その日、世界の果ての島から旅立つ彼らを、島の王が見送っていた。

第四章 『レムリアン・ラブソディ』

第五章へ続く

第四章のあとがき

第三章からコタエというおひとが登場しています。名前はホツマツタエ（一度だけ名前が出てくる）から拝借。で、どんなひとなんだろうとよくよく調べてみたところ……

タナハタ姫コタエ：トヨケ（五代タカミムスビ。豊受大神宮=伊勢神宮の外宮）の孫。父はヤソキネ（六代タカミムスビ。ちなみに息子タカキネに譲位後はカンミムスビと呼ばれる）。イサナミは叔母。兄弟にタカキネ（高木。七代タカミムスビ。アマテルの同学友）、スクナヒコナ、ほか多数。甥にオモイカネ、姪にタクハタチチ姫（オシホミミの妻。ニニキネの母）と、まあ、日本神話のどこかでお目にかかった名前がぞろぞろ出てくる、すごい一族の出身。本人はアマテルの十二人の後のひとりですが、子供は成さなかったみたい。

＊

鶴の羽の織物。鶴の恩返しの話かと思いきや。本当にそういう織物があったようです。起源は横糸雄鶴の羽、縦糸雌鶴の羽で織ったもので、ちなみにこの織り方は妊婦さんの腹帯用だったとか。物理的な保護と、妊婦さんと胎児は嫉妬とか怨恨といったネガティブなエネルギーを向けられやすく、そういった障りをブロックするためでした。

＊

古文書、石のモニュメント、地層には、かつて起こったことのほんのわずかな痕跡しか残っていない、と神秘学はいいます。では神秘学の情報はどこから？ 霊視ですね。また、最近ではチャネリングという方法で。レムリアやアトランティスについての情報は多々あるものの、人によって言うことが違う。霊視やチャネリングの能力の違いからくるものらしいですが、だからレベルの近い人の言うことは互いに一致しているということなんでしょうと思います。

興味深い話にはつい首を突っ込んでしまいたくなりますけれども、ディープに突っ込んでるとこちらの寿命が尽きちゃう恐れがあるため、涙を吞んで資料とする対象を絞ることにしました。

スコット=エリオットの地図、というのがあります。何枚もあって、かつての大陸らしきものが現在の世界地図に重ね合わせて描かれている。でも、いったいつ頃の？ どういう順番？ スコット=エリオットの著作も見つからないし、さっぱりわかんない。と放置していたところ、見つけました！ 海外のサイトに『失われたレムリア』と『アトランティスの歴史』を！（あとがきの終わりにURLを載せておきますので興味のある方はどうぞ）久々に血沸き肉躍る思いで飛びつきました。結局、内容は『神智学大要』に書かれていることとほとんど同じだったのですが、地図に関してはより詳しく解説されているので、大収穫でした。

さて。

レムリア時代のが二枚（第四章の表紙に使った地図のシルエットはレムリア時代のもの）、アトランティス時代のが四枚。ああ。ミネムラは誤解していました。アトランティス大陸というものを。島じゃない。最終的には島にまで縮小して水没してしまいましたが。大陸だったんだー。だからアトランティス大陸の西海岸云々てったら……。え。ここがアトランティス大陸の西海岸……。築き上げたものがガラガラと音をたてて崩壊していく……。いやいや、崩壊するほど築き上げてないでしょ。と自分で突っ込みつつ。アトランティス大陸はほんとに大陸だった！ は、まあ、大発見でしたが、古代の太平洋はどんな状態だったか、どーしても知りたくて古地図を探したのでした。見ていただければわかりますが（すみません、海外サイト見てください）、太平洋に大陸があった時代があるのですよね。レムリア時代にはあった。でも百万年前には既になくなっていく。太平洋に大陸はないものとして第三章を書いてしまったので、あったらどうしようと思ってた……。ムー大陸。ムーという名はスコット=エリオットの著作には一度も出てこない。神智学大要ではトロアノ文書を引用してアトランティス最後の大破局の文脈で

『ムーの土地は犠牲となった（影響を受けた）』。チャーチワードは同文書、同部分の引用で『ムー大陸は犠牲の運命にあった』。というので、（ユカタンのマヤ人の言う）ムーという場所があったのでしょうか。アトランティス時代には共和国から王国から、無数の文明があったそうですし。

*

気になったのは日本です。レムリアの時代からほぼ、だいたい、なから、若干、かたちを変えながらも同じ場所にズーッとある。それでいてアトランティス文明の影響をあまり受けていないらしい。（第三章のあとがきで、日本語はアトランティス系みたいなことを書きましたが、膠着語…特徴の一つが構文。主語－目的語－動詞の順番で文を作る…として同じ系統、という意味です）

このあとがきの最初のところで、タナハタ姫コタエの祖父がトヨケだと。崑崙(こんろん)の西王母がこのトヨケに師事していて、家族ぐるみで親交があったという記述がホツマの15文にあるのです。この説話が本当なら、トヨケは中国神話の東王父ということに――はてさて。不思議の国、つかめない国、日本。

2021年12月01日 記

参考サイト

『失われたレムリア』（英語）

<https://www.sacred-texts.com/at1/t11/index.htm>

『アトランティスの歴史』（フランス語）

https://www.ebooksgratuits.org/html/scott-elliott_histoire_atlantide.html#_Toc286178133

PCを「日本語じゃない文字を翻訳する」に設定しておくといゃんじゃん翻訳してくれます。翻訳日本語なので読んでるとストレスはたまります。

奥付

Salamander in the circle

第四章 レムリアン・ラブソディ

2021年12月01日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材 「月とサカナ」 <http://snao.sakura.ne.jp/>

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
